

アジア・オセアニアの大学生に真の日本の姿を知ってもらうこと、日本を含む各国の大学生に相互理解を進めてもらうことを目的として、1975年にJALにより始められたJALスカラシッププログラム。近年では日韓の中学生の交流プログラムも開始されるなど新たな展開を見せています。1990年よりこれらを引き継いで運営する公益財団法人JAL財団の山口順一常務理事に、その変遷や近況について聞きました。

正しい理解を深めるために

1974年1月、アセアン諸国を歴訪された田中角栄首相(当時)は、急速な経済進出により日本に支配されるとの危惧を抱いた学生たちによる反日デモに遭遇されました。その誤解を解く



第1回プログラム修了式(1975年)
中央はJAL社長の朝田静夫(当時)

アジア・オセアニアの 友好と発展のために

JALスカラシッププログラムの40年

ためにJALとしてサポートできることはないかと考え、各地の学生に真の日本の姿の理解と、日本の学生などとの交流による相互理解を深めてもらうためのプログラムを開始しました。40年を経た現在は、当初のフィリピン、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイに、グアム(アメリカ)、韓国、オーストラリア、中国、

台湾、ベトナム、カンボジア、ラオス、インドを加えた各地から、毎年25名前後の学生を日本へ招き、初夏の約3週間、年ごとに変わるテーマに沿って見聞を重ね、考察し、その成果を発表してもらうという形式でプログラムを進めています。初期の参加者の関心は、「先進国の日本について知りたい」という一点に絞られていました。しかし、近年は、「他の参加者の出身地、考え方や価値観も知りたい」と関心が多様化しつつあるため、日本を含むアジア・オセアニア各地の関係や地域全体にも視野を広げ、今年のテーマも「アジアの未来予想図 - COMPASS TO THE FUTURE OF JAPAN AND ASIA」となっています。

さらに、近年は石川県のご協力により、伝統文化に彩られた金沢市、白山市や、夏祭りなどの伝統行事や豊かな自然を体験できる能登を訪れることとしていきます。これにより「日本が近代的・合理的なもの一辺倒の先進ハイテク国というわけではなく、それらと伝統文化や自然を調和させて成り立つ国であることに気づいた。独自の伝統文化や自然を保ちつつ自国を発展させるための良い参考となった」との感想が多く述べられるようになっていきます。



公益財団法人JAL財団 常務理事
山口 順一

日韓中学生対象の新プログラム

2015年に国交正常化50周年を迎えた日韓両国は、さらに相互理解を深め、強い信頼関係を築いて力を合わせ、お互いの発展を目指すことが望まれています。そこで同年から、よりソフトな感性を持つ両国の中学生の交流



石川県で国際交流まつりに参加(2015年)

プログラムを開始しました。

1年の間をあげてお互いの地を訪問し合うもので、初年度にあたる昨年は、和歌山市の中学生8名に韓国大邱市で、当地の中学生8名と交流してもらいました。今年は、大邱市の同じ中学生を和歌山市へ招き、同市の中学生と再会してもらう予定です。4泊5日の相互訪問では、お互いの家庭に2泊ずつホームステイを行います。また、学校行事にも参加してもらい、ご家族、他の生徒、先生方にも交流に加わっていただくこととしています。

既に多方面より「非常に良い取り組み」との評価をいただいております。他の国・地域へと対象を広げる価値も十分にあるものと考えています。

卒業生のネットワークづくりへ

これまで、大学生を対象としたプログラムの卒業生が自発的に交流を続け、誘いあって来日し、財団を訪れるということが少なからずありました。そこで、親近感を深めてくれた卒業生を日本につきなぎ留めておきたいと考え、2013年より歴代卒業生の縦と横のつながりを作る同窓会の開催に着手しました。マニラとクアラルンプールを手始めに既に7つの国・地域で開催しています。「国の発展の参考とするために先進国の日本を見たいと考えて参加したが、自分の成長にも大きく役立つ。同じ思いを持つ仲間と協力して恩を返したい」との言葉を各

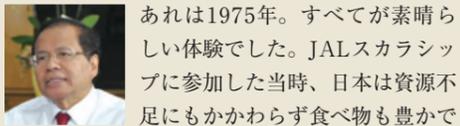
地で数多くいただいていることが印象的です。数多くの卒業生がプログラム参加後



韓国大邱市の宿舎にて
(日韓中学生交流、2015年)

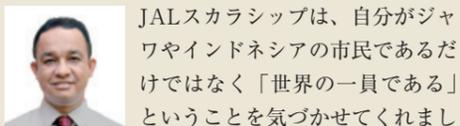
**JALスカラシップ
40周年記念フォーラムに
寄せられたメッセージ**
(インドネシアの現役関係より)

リザル・ラムリ海洋担当調整大臣
(1975年度・1期生)



あれは1975年。すべてが素晴らしい体験でした。JALスカラシップに参加した当時、日本は資源不足にもかかわらず食べ物も豊かでも恵まれた生活を送っていました。一方、インドネシアはエネルギーが豊かで土地も肥えているのですが、多くの国民が食にありつけずに苦しんでいたことに疑問を持ちました。日本での経験から、インドネシアの子どもたちが国とともに成長するためには、教育が必要だと気づきました。多くの子どもたちが学校に通えるよう起こした運動が実を結び、政府によって6年の義務教育が導入されました。インドネシアの学生に、日本の学生と文化交流を行う機会と学ぶ機会を与えてくださり深く感謝します。

アニス・バスウェダン教育・文化大臣
(1993年度・20期生)



JALスカラシップは、自分がジャワやインドネシアの市民であるだけでなく「世界の一員である」ということを気づかせてくれました。視野も広がり、多様性を尊重する基礎ができ、平和の大切さも知ることになりました。異文化交流の経験は、自国の文化への理解も深めてくれました。海外に行くことで自分自身や、そのバックグラウンドを理解することができたのです。私の心は皆さまとともにあります。2カ国間の友情と連携を継続していきましょう。

に各国で重要なポストに就かれています。なかでも、インドネシアではお二人の卒業生が現役関係として活躍されています。昨年、ジャカルタで同窓会を兼ねた「JALスカラシップ40周年記念フォーラム」を開催した際、残念ながらお二人が、電話回線を利用して熱のこもったスピーチをしてくださり、会場を感動で満たしてくださいました。卒業生の皆さまには、プログラムの継続、発展にご支援をいただくとともに、そのネットワークをさらに広げ、その結束により日本を含むアジア・オセアニア各地の相互交流の促進や、それによる地域全体の経済・文化的発展にご尽力いただければ大変ありがたいと考えています。



同窓会を兼ねたJALスカラシップ40周年記念フォーラムの様。在インドネシア日本大使館の後援を得て盛大に開催されました。